

# 政務活動旅行報告書

報告者：小木曾 智洋

視察日	平成 29 年 2 月 1 日（水）
視察内容	福井県坂井市 三国湊町家活用プロジェクトに付いて
視察者	山崎 憲伸、加藤 義幸、神谷 寿広、小木曾 智洋、野本 篤

## 【事業概要】

三国湊は中世からの歴史を持つ湊町であり、商業活動の活発化に伴い発展し、現在の市街地の外観は、江戸時代初期に出来上がり、江戸時代から明治初期にかけ北前船の出入りする北国七湊の一つとして繁栄を迎える。明治中期以降、鉄道開通とともに港湾機能は著しく低下、又、経済力も急速に衰退し商業力を失ってしまった。大正に入り発動機船を導入し、底引網漁業が始まり、商港から漁港へと転換していった。戦災、自然災害にあわなかった為、湊町としての繁栄を今でも偲ばせており、町並み景観と多くの歴史文化遺産は、現在にもなお多く残っている。

三国湊での歴史的建築物を含めたまち並み整備の取組は、旧森田銀行の修復(H6-H11)をはじめ、三国町景観まちづくり条例の制定(H13)、国庫補助による街なみ環境整備事業(H17-H25)、住宅修景助成事業(H17-)、三国湊町家館の完成(H18)、合併後の坂井市景観条例の制定(H20)等多岐に亘り、H24 に福井大学との空き家調査の後、H25 から H27 にかけて、三国湊町家活用プロジェクトの実施を行った。



旧森田銀行

この三国湊プロジェクトの運営主体は三國會所と云われる H24 に設立された一般社団法人である。この三國會所の一番の目的は三国のまち並を後世に残すことであり、市民を中心に約 30 名により構成され、そのメンバーには商工会や観光協会も名を連ねているが、市の職員ははいっていない。三國會所の主な活動として本プロジェクトの他、旧森田銀行、旧岸名家館、三国湊町家館の指定管理等多岐に亘る。

現状、三国湊の直面する課題として急加速する高齢化と人口減少によるまちの空洞化、空き家、空き地の増加、これに伴う、活力の低下、景観の喪失と云った大多数の自治体が抱える諸問題が、絵に描いたように表面化してきている。これらに対処すべく本プロジェクトは福井県の「ふるさと創造プロジェクト事業」にも採択され、H25 から H27 までの三か年をかけて執行された。



町中拠点マチノニワ・マチノクラ



マチノクラ内上映ガイダンス映像

本プロジェクトの内容としては、先ず 7 件のハード整備事業が挙げられる。街中拠点としての下新公園「マチノニワ」、三国湊座奥倉庫「マチノクラ」整備、4 件の空き家改修と民間公募による利活用、1 件の空き家改修としてデザイナー監修によるゲストハウス「三國詰所」整備

民間公募による利活用、1 件の空き家改修としてデザイナー監修によるゲストハウス「三國詰所」整備

が行われた。ソフト事業としてワークショップの開催、東京大学、福井大学との共同研究、デザイナーであるアレックス・カー氏の招聘、ガイダンス映像作成、予約サイトの構築等がある。そして、今後活用を検討している町家が2件ある。ハード事業整備の実施主体は下新公園マチノニワを除き三國會所であり予算は、改修費として約1億300万で県市ともに1/2づつの補助があり、ソフト事業約4,400万に関しては100%県の補助であった。町屋家屋に付いては、外観改修と仲介を行い、内装に関しては活用者が行った。



活用物件  
(フレンチデリの店)



今後活用検討中の町屋

本プロジェクトの成果として、上述、6件の空き家改修と利活用、及び、都市公園の改修、観光入込客数の増加(H26:64,000→H27:81,000)、新たな移住定住者(6名)、東大との共同研究による「三国まちづくりビジョン」の策定等がある。三か年の計画が終了した現在に於ける今後の方針として、継続して空き町家の活用を基軸としてまちづくりに取り組むこととしている。



マチノクラ内にて



ゲストハウス「詰所三国」前にて

### 【所感・岡崎市への反映】

坂井市に於ける三国湊町家活用プロジェクトは、補助金を最大限に利用し、リノベーションによる空き家等を活用した観光事業としては、一定以上の成果を収めていると考える。成功の背景には、自然災害、戦災から免れていた為、古い町家、街並みが、当時のままの姿をある程度残していた事と、三国湊自体、観光面での知名度を持っていた事、そして、三國會所の設立が考えられる。又、三國會所が、本当の意味での住民主体によるまちづくり団体であった。ただ、歴史的建造物や、本プロジェクトによるハード事業で整備された活用物件6件が一箇所に集中しておらず、割と広範囲に点在している為、街並みとしては町家と現代家屋が混在している状況であったことが惜しまれる。予算の都合上仕方ないことではあるが、今後も引き続き町家活用の実施を行うことで統一がとれてくるのではないかと考える。

岡崎市に於いても、中心市街地での空き家、空き地の問題は顕在化しておりリノベーション等、活

用による賑わいの創出が求められている。本市に於いても、リノベーションスクールを通じ、ビジネススタートアップ等の講座の開催等行っているところである。自治体の規模により、困難度の差はあるが、三國會所のように利害関係が多少なりとも在るであろう各種団体のメンバーが顔を揃えた住民主体団体が、大義に向け同じ方向に向けた意思統一が必要である。行政が前面に出て主導するのではなく、補助金も一定以上は必要ではあるが、規制緩和や制度作りに徹することが道筋としては最善であると考えられる。

#### 【同行者の所感】

○ 空き家の利活用を通じたまちづくり（リノベーション）。町家等の空き家を保存、活用して「来街者と住民が歩み寄り、気持ちの良い賑わいづくり（観光誘客と商業再生）」、「町家、街並、歴史文化遺産の保全と継承」地域住民、三國會所、行政が一体。岡崎市に於いては、住民と民間企業、行政等団体が連携、主体となってプランが実施されるか。

○ 鉄道開通とともに港湾機能が低下、経済力も商業力も失いつつある現状である。これまで戦災や自然災害に遭わなかった為、古い街並みや景観はそのまま残り、多くの歴史文化遺産が現在も残っている。その残った建築物は、現在に於いては歴史的にも価値があり、またデザインに於いても若い世代には新鮮なものに映ることから、リノベーションによるまちづくりが「町家活用プロジェクト」として行われている。

このプロジェクトの特徴として、さまざまな民間団体を引き込んで、新たに平成 24 年に設立形成された「一般社団法人 三國會所」の存在が大きい。どこか一つの団体が主になると人間関係のバランスや、権威争いが先に立つところだが、それぞれが横一列となり、方針や活動に対して各々の得意分野で活躍できていた。

本市においても様々な事業に対して、こうした民間の力をうまく活かせる形を見つけるべきと考えられる。

○ 2006 年 3 月に三国町、丸岡町、春江町、坂井町の 4 町が合併してスタートした坂井市だが、合併のメリットがあまり無いように感じられた。4 地域それぞれに特色あるまちづくりに取り組んでいるようである。

三國湊町家活用プロジェクトは、古く利用されていない古民家を家主から寄付を受けたりして、市で改修し、観光等に活かそうと取り組んでいる。岡崎市としても東の玄関口である藤川地区をこのような形で整備活用すべきと考えられる。

○ 今回、視察した三國湊町家活用プロジェクトに関しては、補助金を活用した空き家となった古民家をリノベーションした観光事業は一定の効果をみているが、坂井市は三国町、丸山町、春江町、坂井町の 4 町が合併した市とのことであるが、そのことによって全国的に認知度の高い三国や丸山と云ったネームバリューが活かされなくなってしまったと感じた。

観光事業は市の名称を含め何が強みなのか、何が全国的に認知されているのかを知って活かすことも重要なファクターであると改めて考えさせられた。

# 政務活動旅行報告書

報告者：野本 篤

視 察 日	平成 29 年 2 月 3 日 (金)
視 察 内 容	京都府舞鶴市：歴史を活かしたまちづくり施策について
視 察 者	加藤義幸、山崎憲伸、神谷寿宏、小木曾智洋、野本 篤

## ◆舞鶴市について

京都府の北部に位置し、福井県と隣接している。近畿日本海側で唯一の重要港湾である「京都舞鶴港」を擁している。

また、国・府の海事機関が集まっており、日本海側唯一の軍港を中心とするまちから、戦後は平和産業港湾都市に転換している。

市内に東舞鶴と西舞鶴、またその間に中舞鶴と地域割りがあり、東と西ではそれぞれに独自性をもっており、同一の行政区にも関わらず、東西それぞれに警察署長が存在することや、東は海軍、西は城下町と観光産業も大きく二分されていた。



## ◆施設概要

### ①「東舞鶴」 舞鶴赤れんがパーク

#### 住 所

京都府舞鶴市北吸 1 0 3 9 - 2

#### レポート

舞鶴市といえば「舞鶴港の引揚げ」が有名であり、観光の中心的要素であった。しかしながら、徐々に衰退していく観光産業に対し、市職員の不安が高まっていき、新たな観光産業の立ち上げを使命に視察を行った。

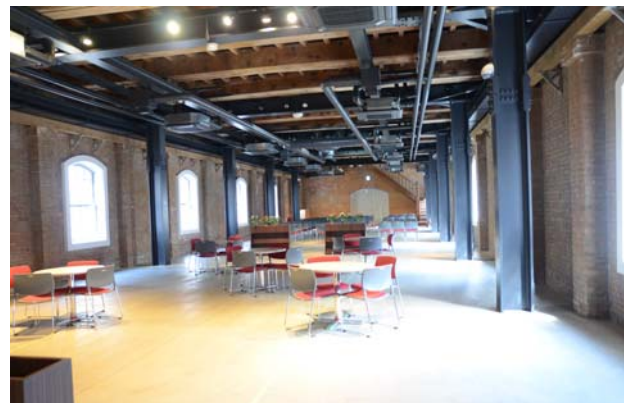
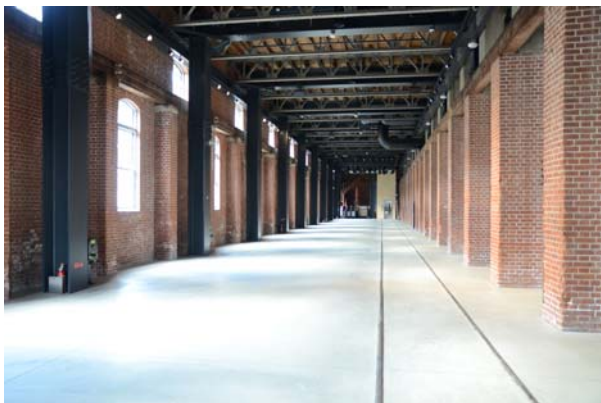
まちづくりの先進都市である横浜市への視察において、赤れんが倉庫を活かしたまちづくりの取り組みを知ったことで、舞鶴の赤れんが倉庫に観光価値を見出した。

もともと舞鶴市民にとっては赤れんが倉庫に対しては軍の施設であったことから、あまり良いイメージではなかったが、調査の結果、12棟の倉庫群となり、うち8棟は国の重要文化財に指定され、平成24年に「舞鶴赤れんがパーク」としてオープンした。「日本の近代遺産50選」や「美しい日本の歩きたくなるみち500選」にも選ばれた。

1号棟はれんがをテーマにした博物館、2号棟は海軍メニューを充実させたカフェを併設した市政記念館、3号棟には売店と舞鶴の歴史や旧軍港都市の魅力を展示している。4号棟はクラフト&アートの創作空間。5号館はイベントホールとなっている。横浜市の赤れんが倉庫のように商業施設を多く誘致はしていないが、市民にとっても集いの場であり、交流拠点としての役割を大きく担っている。

また、東と西で交互に行われていた成人式も昨今では、統一して赤れんがパークで挙行されている。

モダンでノスタルジックな内外の施設は多くの映画やドラマでの撮影場所としても利用され、その実績を観光の要素として上手く活用されていた。



## ②「西舞鶴」 田辺城資料館

### 住 所

京都府舞鶴市南田辺 1 5 - 2 2

### レポート

西舞鶴の歴史まちづくりの拠点として、田辺城の本丸跡地を利用した公園で、平成4年に建てられた田辺城城門が入口となっている。石垣が立派な城門であり、以前内堀があった場所に建てられている。

城門の2階が資料館となっており、初代田辺城主の細川幽斎（藤孝）の籠城戦や生涯をメディアや模型を使って展示している。

また、公園内に「彰古館」として市の指定文化財の錦絵の資料などのパネルを展示している。

今後も田辺城をシンボリックに復元するために水堀の復元、茶室や公園北側に庭園までつながる水回廊の整備なども計画している。



## ◆考察と岡崎市への反映

舞鶴市の観光入込客数の推移は緩やかながらにも右肩あがりであった。

東舞鶴にて海上自衛隊および海軍をキーワードに近代歴史遺産を中心に盛り上がりの傾向である。

一方、西舞鶴の田辺城を拠点にした歴史まちづくりの停滞は明らかであり、本市の歴史観光に似ているように感じた。

城下町として古い町並みを残し、雰囲気演出をするために、以前からある商業施設に揃いの暖簾をかけたり、田辺城を中心に歴史を背景にしたイベントや商業イベントなども行われている。

観光資源は舞鶴市も本市も歴史的なものが豊富である。保存することに注力するのではなく、いかに観光客の目に触れるのかを考えた「見える化」や観光資源を活かした人の回遊ルートを確立し、町の中心にある、仏閣などの歴史遺産を見てもらうようにと、人の流れを意識した道づくりが必要であると、共通課題として学ぶことができた。

また、印象的だったのは、まちづくりや観光振興において、行政からのハード面は、お金をかければ可能なことは確かである。

しかし、それを活かしていく民間活力や地域の盛り上がりである「うねり」がなければ、まさに焼石に水であるという事実。ソフト面である地域の「うねり」を促すことに何度となく挑戦し、そのたびに挫折をしてきた。

その原因を突き詰めると、市民が自分たちの市に誇りを持っていないこと、市民の郷土愛の低さではないかと分析されていた。

子どもの頃からの自分たちの街にある歴史文化や遺産をとりいれた郷土愛教育をしっかり展開することで、重要となるソフト面を担う人材育成をしていくことが、本市にとっても、必要なことであると痛感した。

## ◆同行者の所感

※ 地域の誇り・シンボルである田辺城を拠点とした「まちなか回遊」のための環境整備。歩行者の回遊性を高めるために「総合案内板」「周辺案内板」「誘導板」などを設置し、歴史資源に対する理解を深めるとともに、特徴をアピールする機会を、当市においても観光誘客する為には城下町文化を多世代が学び、交流できる環境づくりが待たれる。

※ 舞鶴市は田辺城の城下町、商港として栄えた西舞鶴と、軍港として栄えた東舞鶴が、軍の都合により強制的に合併させられた歴史を持つ。

現在舞鶴市では、歴史を生かしたまちづくり施策として、西の田辺城、東の軍施設であった赤レンガ造りの建造物を生かしたまちづくりを市民協働で行って

いる所であるが、担当者からは笛吹けど踊らず、或は、市民意識向上のための万策は尽きたと云った話があった。

根底には東西の市民性の違いや、教育の問題が在ったのでは、との事だった。市民協働が成功した小浜市との違いは自治体規模による各地区の大きさ、及び、行政のきめ細やかさではないかと考える。

中核市である岡崎市も旧中心市街地を含む東岡崎駅周辺地域と、JR 岡崎駅を中心とした地域と、舞鶴市と似たような二面性を持つ。市民意識を同じ方向へ向けるには、どちらかに偏ることなく、又、学区と云った大きな単位でなく、単子、或は、もっと小さな単位で、行政が粘り強く、深く関わっていくことが大切であると感じる。

- ※ 1943年に舞鶴市と東舞鶴市が合併し、舞鶴市が誕生した。旧舞鶴市は西舞鶴と呼んでいる。地形的な要素もあり、東と西の交流が滞っているようだ。東は赤れんが・海・港を活かしたまちづくり、西は田辺城を中心とした歴史まちづくりに取り組んでいる。

本市に於ける歴史まちづくりで欠かせないことは、岡崎城跡の活用が第一である。導線の整備は進められているが、今後、いかに城跡を活かしていくかがポイントになるであろう。

- ※ 舞鶴市は、田辺城の城下町として栄えた西舞鶴と、軍港として栄えた東舞鶴が軍に強制的に合併させられた歴史があり、東と西の歴史の違いと、それぞれの地域住民の対抗意識により一体化が図れず、行政も合理化がなかなかできず、非常に効率が悪いと感じた。

視察においても東舞鶴の赤れんが倉庫の説明を受けるはずが、西舞鶴の田辺城公園および周辺整備についての説明をされたことは、そういった一体感のないところからきているのかもしれない。万策尽きたと担当職員は無力感をあらわにしていたのが印象的であった。

今回の3市における視察を通じて、市民の一体感をいかに醸成できるかが行政の重要な使命であると感じた。

本市においても歴史、文化の異なる地域が多く合併している。それぞれの地域の特質を活かしつつ、共通認識を育んでいくことは非常に大切なことであり、そういった意味において誰もが知っている郷土の英雄、徳川家康公を中心とした郷土愛と観光、これからの郷土を担う子ども達に郷土を愛する心を育むことを目指す内田市長の政策は的を射ていると再認識した。